

平成3年9月24日発行

鵠沼

久 久 比 奴 末

は ま ゆ う と 櫻 貝 と
海 光 る わ が 故 里

第 61 号

内容 民俗学者丸山久子先生

田中まさ子

大庭御厨とその背景

吉田興一

芸道一筋

杵屋五十郎

藤沢民話甚句

” ”

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（昭和8年刊）で、「くくいぬま」と読みます。これは鵠沼の地名なのです。

民俗学者丸山久子先生

田 中 まさ子

丸山先生は昭和61年3月11日に、七沢で逝かれ、13日に鶴沼の教会で永いお別れをして、あれから5年の歳月が立ちました。

信州の方言で気楽におしゃべりをする方を失い、私は何ともつらい日々でした。来る春ごとに、先生のご近所の玉生さんに電話します。「今年は辛夷（こぶし）は咲いたでしょうか。」と、「よく咲いていますよ。ほんとうに辛夷明かりと言うのでしょうか。白い花が青空いっぱい咲いていますよ。」先生のご生前にはいつの春も秋も、あの縁側に掛けて、よき隣人であった玉生さんと庭の花々をながめましたね。

おうすを頂いたり、柿を食べたりして故里のことを語りましたね。「先生だけは止めて頂戴よ。」とよく言われましたが、地味な謙虚なお人がらに、いつしか私も民俗学という学問にひかれていきました。・・・先生、あなたからは色々なものを戴きました。庭のお花ばかりではありません。あなたは、肉身を失った孤独に耐えて、藤沢や鶴沼を愛して一生を終わられました。ご自分だけを頼りに、おつらい日もあったでしょうに。

私は今、お年寄りのお仲間がふえました。鶴生園へ行っています。この園のお仲間、先生が書かれた「藤沢のむかし話し」を読んで上げたいと思い、本を持って行ったのですが、みなさん耳の悪い方が多く、聞いてくださいません。かといって民話は、マイクを持ってするようなものではありませんから、残念でしたが、黒崎先生の可愛い童画を見せて上げました。

この園の人達とのつき合いは、まったく「裸」のつき合いです。本当に「うそ」も「かくし」もない、また見得も、体裁もないつき合いで本当に安らぎます。私は先生が藤沢のためになされた数々の偉業を私自身が勉強して、書き残しておきたいと考えております。

体調が悪いので、今日はこれでおきますが、お庭の辛夷の樹の下で、愛猫のミーちゃんも眠ってます。天国で眺めてくださいね。あれから、藤沢も変わりつつあります。若い世代の人が多く、文化は進んでおります。今の若い人達の持つ夢と、私達年代が持った夢と

には、余りにも大きな開きのあるのに啞然としてます。「先生が聞いたら、何と言うずらね。」東京から鶴沼と住んだ年代か私と同じで、鶴沼は好きでしたが、寒い冬空にそびえる信州の山々を忘れがたくなつかしましたね。ふり返るまいとする過去は遠く、早く忘れたいと思います。

おわり。

大庭の御厨とその背景

吉田 興一

大庭の御厨にふれるまえに、10・11世紀における武士の発生の原因となった世情を考えてみたい。

1. 武士の起こり。

平安時代の末期になると、(たとえば、1086年、白河天皇、院政開始)中央の統制が乱れ、その結果、地方は混乱し、国司は権限を悪用し、一般公民がこれにを正すには到底無力で、収奪される被害が一層増大した。そのため、逃亡する公民は貴族や社寺の私民になるか、その逆に、浮浪人や盗賊の武力集団を結成して抵抗するしかなかった。この武力抵抗がいわば武士のおこりの遠因となる。そして、武士団がより大きな結合を計っていくには、武士の棟梁を必要とするようになった。

2. 平氏のこと。

第50代桓武天皇(781)の皇子を葛原親王といい、その孫が高望王で宇多天皇(887-897)のとき平姓を賜った。そして、桓武平氏が先ず坂東の地に発展した。高望王の子は、八人いて、国香、良兼、良将、良孫、良広、良文、良持、良茂という。俗に言う関東八平氏である。このうち、藤沢市に縁のあるのは良文で、村岡城主であったという説があり、村岡五郎と称した。しかし、「今昔物語」；〔註〕平安時代の説話集。31巻(8・18・21巻は現存しない。)成立年代不詳。；には、下総の国(茨城県)に平良文、通称村岡五郎が源充(みつる)という武者と一騎討ちをして、互いに勝負が着かないかったという物語が載っている。当時は、先に述べたように中央から派遣されていた国司、群司は武装して辺境の治安を守っていたが、手に余って群盗・凶賊がはびこるようになり、土地の豪族も人を集めて武装するようになっていた。そして、国司と豪族との争いも起こるようになり、殺伐な様相はいっそう濃くなってきた。ことに、坂東の地では、武力を背景にした平氏と源氏の家柄をもつ集団の抗争がつづき屈強な武者が輩出しはじめていた。その代表的な大乱が平将門の朝廷に対する反逆となるのである。

平将門は天慶3年(940)の2月に、平貞盛、藤原秀郷(倭藤太)のため、下総の国で

討死した。将門は平良文の甥にあたるが、承平5年(935)一族の内紛から将門が乱を起こし、天慶2年(939)関東の大半を支配下におき、みずから新皇と称して自立した。その謀叛の結果、鎮圧軍のために滅ぼされるのである。この当時、朝廷では長年にわたり、天皇の外戚を占めてきた藤原氏も末期症状を示し、公家・貴族の全盛とはいえ決して安定していたわけではない。それにもまして、諸国の農民は窮状を呈し、坂東の地も例に漏れず貴族たちの手の届かない貧しく、秩序の混乱した世界であった。そのなかであって、貴族の番犬から独立して、支配地を広げていく自信あふれた武者の姿があったのである。

3. 国司、郡司、と荘園のこと。

そもそも、645年、中大兄皇子や中臣鎌足らが蘇我氏を倒して大化改新を断行し、その後、律令制がはじまるのであるが、壬申の乱を経て天武天皇の没後、701年に大宝律令が制定されて中央集権国家が成立した。そのときの地方官制で国(国司)群(群司)郷などの組織ができた。723年墾田の私有が認められ、地方の豪族や有力な農民は奴婢や浮浪人を使って開墾を競い、これらの私有地を荘園といった。これは、公民の浮浪化を防ぐ目的をもったものでもあった。そして、これらの開墾地は地方豪族や有力農民の名をとって〇〇名(みょう)と呼ばれ、墾田地系荘園として区分される。これに対し、中央の権門勢家や大社にその土地を寄進し、みずからは荘官となって現地の支配権を確保した。この方を寄進系荘園という。〔注〕後で記述する「御厨」は、この系統である。

4. 源氏のこと。

さて、ここまでは、平氏について若干ふれたので、源氏についても簡単にふれてみる。関東では将門の乱以後も平氏一族が勢力を振るっていた。しかし、1028年に上総介平忠常が反乱を起こすと、甲斐守源頼信らがこれを平定し、こんどは、源氏が関東に勢力を伸ばすことになった。源氏とは、平安時代の中頃、第56代清和天皇(858)の皇子貞純親王の子経基が源の姓を賜って、武蔵守上野介に任ぜられたのが、関東地方と源氏との結びつく糸口となり、源頼義が相模守となって下向し移り住んだことが鎌倉との深いつながりをつくったといえそうである。その後、源頼義、義家父子が陸奥守兼鎮守府将軍に任ぜられ、安倍頼時・貞任の乱(前九年の役・1051-62)および清原清衡を助けて家衡を討った清原一族の乱(後三年の役・1086-88)を平定したので、一気に源氏の信望は東国の武士団の

中に高まったのである。それに、1063年戦勝記念に石清水八幡宮を勧請し、鎌倉郷由比に社殿を造営した。これが今に残る元八幡であり、八幡宮の歴史は鎌倉の歴史といわれるようになった。前九年の役に、十九歳で武勇の誉れを高くした義家も、この社で元服の式をあげ、八幡太郎を名乗ったのである。後三年の役の起こる前には、由比八幡宮を修復したりしている。この奥州征伐の平定にかかった長い年月の間に、源氏と東国武士との関係は深められ、義朝も天養の頃（1144）鎌倉に住んでいたのである。

5. 摂・関政治の末路

ご存じのように、10世紀後半から11世紀にかけてはまだまだ藤原氏の全盛時代で、藤原氏の長者が摂政・関白として完全に政権を握り、他氏の進出を許さなかった。これを摂関政治といい、経済的な基礎は荘園制度に変わり、国司もその力を失った。1068年、後三条天皇が即位すると、藤原氏は天皇の外戚の地位を失い、そののち、後白河法皇で有名な院政治が出現し、白河（72代）法皇・鳥羽（74代）上皇・後白河（77代）の約80年をとくに院政期という。当時、武士の棟梁は平氏と源氏でそれぞれ武士団を結成し、次第に武力を背景に力を蓄えつつ中央への進出を狙うようになった。さいわい中央政界でも、院政の成立後、いっそう貴族の勢力争いが複雑を極め、その解決には武力を必要とするようになった。朝廷、院庁、摂関家などはそれぞれ源平両氏との結合を深め、ますます複雑さを増していった。保元元年、鳥羽法皇がなくなると、崇徳（75代）上皇と藤原頼長は源為義・為朝や平忠正を味方につけ、後白河天皇を攻撃した。天皇方は源義朝・平清盛と組み、天皇方が勝利をおさめた。（保元の乱・1156）その後、平清盛は後白河上皇の信任のある藤原通憲と結んで勢力を伸ばした。これを不満とする源義朝と藤原信頼が対抗し、戦いが始まり、結局、平清盛は後白河上皇を私邸に迎え、義朝らを攻め勝利をえた。そして、政権を握ることになる。これが平治の乱（1159）である。義朝はここで戦死をする。

6. 大庭の御厨と源義朝

大庭の御厨と源義朝について述べる前に、義朝の業績と、なぜ義朝が鎌倉にいたかを少し解説したのであるが、時代を戻し、先にふれた平良文は、藤沢市村岡に関係があるが、歴史の本には、武蔵国大里郡村岡に本拠を置いていたとある。その子の忠頼は良文の弟にあたる平良茂系の公義の子らとともに北武蔵から相模にかけて、積極的に開発を進めてい

た。良文系は藤沢市村岡から湘南砂丘・大磯山地・湯河原などを、また、その一族系により多摩丘陵の周辺町田市や多摩川流域から川崎市、相模野台地の渋谷をその勢力下においたが、良茂系は三浦半島から鎌倉を本拠にして相模野の南端へも発展した。その後、12世紀にかけてさまざまな武士が相模の土地を争った。源義家の臣、鎌倉権五郎景政（後三年の役で右眼を失ったことで有名）の子景経は浮浪人に目をつけ、彼らを集めて相模野から湘南砂丘の地の開発をもくろみ、かれら浮浪人らは国府からの無差別な徴用労働に反抗して逃亡中の境遇にあったので、主人に仕えての農業に喜びを感じ、すすんで荒蕪地の耕地化に従事した。景経は国府の干渉を排除するために、伊勢皇大神宮の内宮に土地を寄進したのが、大庭の御厨である（1118-20）。北は大牧崎（？）、東は俣野川（境川）西は神郷（寒川郷か）南は相模灘という土地である。景経は内宮へ白布と米・魚などを納め、それと交換しすることによって御厨の産物を手にいれた。こうした御厨には、ほかに平重朝の支配した榛谷御厨（横浜市程ヶ谷区）があった。これらを御厨としたのは、政府が源義家にたいする田畑の寄進を禁止したからである。このなりゆきを黙視しえなかったのが、義家の孫義朝であった。義朝としては、鎌倉の館のとなりの景経が源家に従わないのは我慢のならないことでもあった。これを察知した相模出身の国衙の役人らは、国司の交替のときをとらえて御厨を廃止しようとした。国衙と御厨のトラブルにより、作人は逃散して田畑は荒れ、御厨の機能は停止した。大庭御厨には、鵠沼・殿原・香川・俣野の集落と95町の田畑があり、糟谷（粕谷）荘の153町余、稲毛荘の263町余に比すれば広大な御厨とはいえない小さなものであった。鵠沼には*大日如来を祀った御堂*があり、周囲は森に覆われ、これにつかえる神人の家、景経の館と倉庫、耕作に従事する作人の家が散在していた。景経は作人に農具や種子を貸し、作人は梅雨どきに田植え、秋に稲、大豆、小豆を収穫、ときとして魚をとり、その一部を地代として景経へおさめた。天養元年（1144）9月8日、義朝の名代、清大夫安行は三浦荘司義次、その子義明、同族和田太郎と同助弘、中村荘司宗平ら一千余騎をひきいて御厨に乱入した。かれらは神人らを殺し、そのうえ実っていた大豆、小豆を刈りとり持ち去った。義朝は乱入の理由としたのは、御厨が鎌倉郡のうちにあるからと主張した。これは鵠沼の隣の梶原が鎌倉郡に属し、境川と柏尾川の乱流によって境界がはつきりしなかったためであろう。景経は伊勢大神宮に訴えて

ことなきをえた。ここで注目されるのは義朝の動員した武者が、三浦半島から大磯山地に及ぶことと、神威を恐れない行動であった。その背後には白河法皇が受領（国司の別名）と武者の両者をあやつり、摂関家を抑圧しようとした院政の基本方針があったのである。前記の保元・平治の両乱の後、平清盛の時代になるのであるが、京都における関東武者の戦いは空しく、こうした戦いで最も利益をえたのは後白河天皇であり、相模では成田荘や糟谷荘を獲得したのである。しかしながら、清盛は武者の地頭として六十余州の半国を支配した。相模では清盛の走狗となったのは、大庭景親であった。

その1. おわり。

追記

源義朝にかかわる藤沢市北部の神社をご紹介します。

1. セツ木神社

長後の高倉中学と境川の間に位置している神社で、祭神は源義朝で鯖明神社とも呼ばれ、もともとセツ木村の鎮守様で、境内には三猿が一面ずつに彫られた庚申塔がある。祭礼は毎年十月三日、高倉囃しが奉納される。

2. 鯖神社

湘南台中学と境川の間の川の近くにある小さな神社で、三波、佐波、鯖、佐馬、いずれも「サバ」と読む。源義朝の佐馬守からとったといわれ、源氏を祀り、字を変えたといわれる。毎年十月一日が例大祭、神輿や山車が繰り出し賑わう。

以上は市の観光課及び観光協会が発行した湘南・藤沢「おもしろこみち」という史跡と味覚の案内書より抜粋した。（塩沢さんが発見してこれ、私も頂戴した。）

また、本文の鎌倉権五郎については、「ふるさとまっぶ・村岡」の文中、次のような説明がしてあります。

「10世紀ごろ、この地方に勢力をもっていた平良文は935年に平将門を討って関東地方の一大勢力になりました。このころ（940）平良文は戦勝を祈願するため、京都の御霊神社

から勧請を受け、宮前に御霊神社を建てました。祭神は早良（さわら）親王、鎌倉権五郎景政ほか5座を祀っており、境内にも痘瘡神や七面宮が祀られています。また、村岡城は良文がここに居住した時築いた城といわれ、延喜19年（921）鎮守府将軍に任ぜられ相模国司を兼任しました。村岡城といっても、空堀をめぐらせた山城のようなものであったといえます。」

また、「このほか、べつに川名御霊神社があり、天養4年（941）宮前御霊神社の分社として建立され、川名地区の鎮守様です。鎌倉権五郎景政については、建久年間（1190-99）合祀されたといえます。」

〔註〕御霊神社と早良親王

桓武天皇は、百年前、京都の平安神宮の祭神となったが、その同母弟の早良親王は早くから崇道神社の祭神となり、ついで御霊神社に祀られた。というのは、早良親王は桓武天皇の皇太子であったが、跡目を息子の安殿親王、すなわち、後の平城天皇に譲ろうとしていた桓武天皇にとっては、めざわりな存在であった。それで、桓武天皇は、早良親王を謀反の罪で殺してしまった。殺されて間もなくさまざまな天変地異が生じ、その天変地異は早良皇太子の怨霊のなす業だと考えられ、早良皇太子は神と祀られる。それが崇道神社であり、次いで怨霊となり、神となった人たちと合祀した御霊神社ができ、御霊神社がまた上御霊神社と下御霊神社に分かれた。祇園祭りはこの早良皇太子をはじめとする桓武天皇の時以来のさまざまな怨霊たちの鎮魂の祭りであり、「古今集」の序文に語られる大同元年の「万葉集」の勅選化もこれと関係していると思う。・・・梅原 猛の古代幻視・北野天神縁起の謎より

（日本経済新聞の平成3年5月25日の土曜版）

芸道一筋に

付：藤沢民話甚句

編集委員 遠藤 隆二

野口 ゆくえ

これは、平成3年6月17日に、鵠沼橋通りにお住まいの「杵屋五十郎さん」を訪問してお聞きしたものの記録です。

1. 終戦になる前に疎開したこと。

もともと、杵屋さんは、芝の生まれで、親は芸事が大好きでした。昭和8年頃、東京の家も工場が立ち並び、騒音が酷いので、何処かに転居をと考えていました。関東では、鵠沼が一番いいと、橋通りに一軒家を借りて一年ばかり様子を見ることにした。そこを稽古場にして東京から通っていたが、場所もいいし、津波もこないし（関東大震災の記憶があったから）と、おなじ橋通りに家を建てました。それが昭和9年頃。そして、10年ほどいたら、もうその頃は三味線で暮らせる時代ではなかった。橋通りの家の裏庭の方には少しばかり空いた土地があったので、芋畑などを作っていた。相模湾には、アメリカが敵前上陸するとか噂が広まり、鬼畜米英っていうくらいだから、子供も二人いるし大変でんで、終戦1年程前に群馬県に疎開した。伊香保温泉の近くに疎開したんです。近くに坂東太郎の支流があり、赤城山も見える処でした。飛行機の見えるところは危ないっていうわけです。ですから、すごく辺鄙な山地です。鎌倉から来たってんで、（勝手にそうきめられて）山の斜面の畑を貸してくれた。こちらは百姓をやるつもりですから、三味線も焼いて処分しちゃった。最初は向こうのお百姓が耕してくれたので、あとは自分でやった。肥えをかついでみたが、とてもじゃない、三味線弾きから一遍にお百姓になつたって、できるわけがない。これは大変というんで授産所が変わった。どうにか戦争も終わり、ほっとしているうちに、今度はキャサリン台風が来て、14日ほど雨がふりつづいた。山と山の間の谷川で家の脇を流れていたのが、裏山が崩れて鉄砲水となって死ぬ目にあった。折角持っていた家財も布団も何もなくなった。その上、最初の鉄砲水で流れた原木が貯って堰を作っていたのがまた崩れ、第二次の大きな鉄砲水を引き起こし家ごと流された。家の前に大きな柿の木が5～6本あったが、根っこを逆さにして、家ごと坂東太郎に流されてい

った。そんなこんなで、命からがらやっと藤沢へ戻ってこれた・・・しかし、帰りは上野駅まで貨物のように運ばれて、横浜駅の燃え残りを見て藤沢に來ると、厚木の航空隊を解散してきた兵隊が大きな荷物とか、外套や毛布や刀を持ったりして大変な混雑ぶりでした。

2. 戦後の混乱期に思い出したこと。

昭和19年から疎開していて、13年目に藤沢に帰ってきた頃は、家は売り飛ばしてしまったので、住む所がない。今はここに住んでいます、この家は橋通りにあったのを、区画整理で引っ張って移ってきたからです。

もうその頃には、兄弟弟子は仕事しており、ラジオで放送していた。「キンピラ先生奮闘記」（キンピラ先生〇〇〇？ちょっと不明確）が盛んに連続放送していた。「その作者は鳴山と言うんだ。」と疎開する前に知りあいになった戸川さんから聞かされた。戸川さんという人は文人で、平塚市長をやった人です。戸川さんは、戦時中、久米正雄先生が中心になって湘南文化連盟が出来、錚々たる文士が入っていた中の一人で、そこに私もいらしてもらったことがあるからです。友人の林房雄もいた。久米先生には可愛がって頂いた。福田蘭童もよく知っていたし、この人は尺八で有名だが、奥さんがこれまた有名な女優の川崎弘子さん。鶴沼の川口章吾さんもそのひとり、奥さんが名のとおった書道家です。書道家では、ついこの間、市のギャラリーで遺作展があった佐々木如空さん。私のやっている日本芸能百撰会の題字はこの人の書です。

3. 杵屋五十郎主催の公演会

○日本芸能百撰会のこと○

この会は、日本の伝統芸能の伝承と、価値のある隠れた日本の芸能の掘り起こしと、創作活動の発表・公演・PR・の場とすることを目的としています。このプログラムの一部は、第20回公演のコピーしたもの（ただし表紙とともに）をご覧にいますが、

◎ 主催 日本芸能百撰会

共催 藤沢市教育委員会

後援 諸団体約20団体

◎ 開催時期 毎年1回春季公演

◎ 藤沢市民会館

第1回演～昭和47年8月・・第20回～平成3年5月

○創韻会のこと○

この会は、出演者の資格は日本芸能の専門家に限るもので、古典の伝承と創作活動を行う事を基本とする会です。創作曲に対する振り付けも含むことになっています。

◎ 主催 創韻会

後援 藤沢市

◎ 開催時期 毎年秋季公演発表

会場 藤沢市民会館

第1回公演～昭和55年10月・・第12回公演～平成2年11月

4. 杵屋という芸名を貰う前の青春時代の思い出のこと。

私の生まれは芝の金杉で、兄弟12人いるんですよ。男6人、女6人、今は4人しか残っていません。死んだ兄や姉は、芸人と画描きばかりでした。死んだ姉達は一流でビクターレコードやコロムビアレコードk kの専属で、又料理屋をやつたり、芸者屋さんをやつたり、日本橋芳町で、いろんな仕事をやっていました。新派の有名な役者は、私の姉の三味線でなけりゃいやだという人もあった。それで、私は水谷八重子とか、北村祿郎とか、姉がつきあっていた芸人の全部見てるんです。芸人のウラをよく見ていたので、それで嫌なんですね。そこで、軍人になりたくて、家を飛び出してしまった。士官学校の試験を受けるんですが、金がないんで、随分苦労しました。予備校をかけもちで勉強して物凄く苦労したときのことがいまだに忘れられません。家を飛び出てきたから、一文も金がないんです。電車賃がないから、愛宕下の下宿から神田まで歩きで、昼飯もライスカレー8銭わら半紙一帖8銭、どちらを選ぶか何時も悩んでいました。昔はよく雪が降った。袴と着物で行くにも足袋がない。洋服にするにも靴がない。鼻緒が赤と白のだんだらになった草履をどこからか友達がもってきてれた。マントを着てその草履はいて、何でこんな苦労しなけりゃいけないんだと、雪の降る皇居前で涙こぼしたこともあるんです。芝の愛宕下で下宿してたころ、別の部屋にいる銀座のカフェーの女給さんが私の暮らしを見て、「兄ちゃん、大変でしょう。」とおかずやらなにやら持つてきてくれた。

私の叔父が新橋で刀の研師をやっているんです。研師専門なんです。明日が試験という日、いよいよ金が無くなり、草履もないんで馬のわらじなんか履いた、みすばらしい恰好をしたまま、夜遅く叔父の家に行ったら、「いや、よく来た。いまどうしてる？」とか話してる所を親父にとっつかまってしまった。十八のときですよ。親父が「お前が芸人になるなら、なんでもやってやる。」とくどかれた。そして、十八の秋から三味線を始めたんです。

5. 藤沢民話甚句に手をつけたこと。

話は変わって、藤沢の民話を題材にして歌を作ろうかなあって考えた。私の知り合いのビクター関係の仕事をしている人が賛成してくれたし、商工会議所の人やら、3～4人集まって「それじゃやろう。」って、丸山久子さんにも紹介してもらい、結局70くらい作った。(内容は別添の民話甚句集のとおり。) そのうち、三味線の伴奏入りでレコードも作り、歌も若手のすばらしい人を頼み、振り付けも完成して、市民会館で発表した。53年の市民祭りでも踊った。作曲は三味線もオタマジャクシで五線譜の節がついている。メロディは、本当の甚句のものではありませんが。

長唄というのは、唄を先に習って、三味線は次に習うんです。私が、志を変えてお稽古しはじめた頃のことには一寸触れますと、朝早く、世間が眠っているうちに師匠のところに行きます。弟子には座蒲団などありませんからね、きっちり正座して待っている。師匠のお稽古は午前6:30には始まるんです。右を向いても、左を見ても、銀座の大店の姉さんとか新橋の芸者さん、役者さんとか、そんな人ばかりです。稽古の友達には、落語家の桂文治の息子なんかいました。杵屋六左衛門という有名な家元も来ました。稽古は3分間位ですから、ちょこちょこ聞いて、三味線弾いて3回、あーあーあと思っているうちに終わってしまう。3回目になると、「さあやつてごらん。」やれるものじゃない。参考書も何んにもない。聞く台があるだけ。お師匠さんが怖くて頭に入らない。3回目にピタッと合わないと「お前さん、商売人になるんだろ。」と言われる。稽古が終わり、お辞儀して下がっていく。ザリガニのように戻ってくると、衝立にぶつかる。ハッとした途端に忘れちゃう。姉さん株の内弟子が居て、その前に、大勢並んで座っている。「教えてください教えてください。」って、拜むように頼んだ事を思い出すんです。そういうふうに稽古し

ましたね。師匠は楽譜なんか覚えて、唄や三味線の役に立たない。碌な芸は出来な
いって。要するに、芸の心は楽譜だけを頼りにしては駄目だって言うことを言いたか
ったんでしょうね。

おわり。

次に、第二部として、杵屋さんの手になる「藤沢民話甚句」をご紹介します。そして、
藤沢市教育文化研究所（当時）編集になる「藤沢の民話」・・・第一集から第三集まで・・・
に載っている原文のページ数を付記して70句あまり載せました。

#・・・甚句とは、越後の甚九という人が始めたというのが、民謡で7・7・7・5とい
う四句からなる盆踊り唄。節は地方によって異なる。

米山甚句、相撲甚句、名古屋甚句、越後甚句、博多甚句などが名高い。

（以上広辞苑より）

藤沢民話甚句

杵屋 五十郎作詩作曲

1. 鵜沼・・・・・・・・次の一句だけです。ただし、民話集にない皇大神宮のものが一句、後のほうに載せてあります。

ホイ・ホイ・ホイ

山狩りで いぶし出された大狐

若い衆ワイワイ トッ捕らまえて（トッつらまえて）

狐のなべで 喰ったらば

ソーリャ・ヨンショコリャ どうなった

舌がもつれて腰抜けた

こいつは狐のたたりだと

福富稲荷を建てました

アーア・ソリャコリャヨイトコセー

第1集P. 56-57-58 「福富稲荷」より

以下、杵屋さんの作った甚句を、「藤沢の民話」・・第一集、第2集、第3集・・の順にページに従って記載してみます。

「藤沢の民話」とは、昭和48から53年にかけて、藤沢市教育文化研究所で編集発行されたものです。専任の研究員は所長の若林 翠氏で、民話の調査、聞き取り集録は、丸山久子氏と中島恵子氏のお二人でした。丸山さんは鵜沼海岸駅（小田急）のすぐ東南側にお住いでしたが、先年お亡くなりになりました。ご存じの方も沢山おいでにならしましょう。

民話の内容は、長くなりますので、紙面の都合もあり、搭載しません。

なお、2. 以降では、四角い枠のなかの、お囃子は繰り返すので、省略しました。

2. 高谷の観音さまと蛭・・・P- 7.

お高谷の 蛭に観音逃げ出した

お渡り内の 慈眼寺で

十一面に 衣替え

大船岩瀬の 大蛙

ザリガニ お供にひきつれて

高谷の悪蛭 みな食った

3. 小塚の荒神さま・・・P- 7.

正月のサイトの火事で ドウロク神

尻を焦がすや 手も焦がす

おかawaiiそうでは ないかいな

小塚の伊達者の 荒神さん

こっちや 来いよと 連れてった

十四、十五は えんりょしよ

4. 川名の神光寺・・・P- 8.

お川名の神光寺と大勝寺のお寺さん

神光寺が 火事で丸焼けて

大勝寺に寺ごと 引っ越した

神光寺と大勝寺の お檀家が

神光寺だ 大勝寺ともめた末

仲よく 神光寺と名を変えた

5. 三日月井戸・・・P- 9.

村岡で井戸で産湯は 権五郎さん

三日月井戸の 名が残り

今も湧き出る 岩清水

近郷近在の お盲目さん

杖をひきひき 井戸参り

帰りにゃ 杖なんかいらないよ

6. 琵琶島の弁天さま・・・P- 9.

琵琶島の 辨天谷戸の辨財は

恋の遠藤盛遠が

袈裟の御前を 写し神

弁天詣りが ゾーロゾーロ

帰りにゃ お金もゾーロゾーロ

辨天様も ニーコニコ

7. かぶと松・・・P- 10.

宮前の御霊神社の 裏山に

戦に勝った 権五郎さん

兜を埋めて 松植えた

百々歳経ったら 驚いた

繁りに繁った その枝は

地面にゴッソリ 枝垂れた

8. 晴明塚（一）・・・P-12

宮前の晴明塚での 雨乞いに

お天気博士の 晴明（安倍晴明）が

雨降りお経を 読み上げりゃ

黒雲忽ち 湧き起こり

タンボや畑に 雨が降る

アア豊年だ 万作だ

9. 大塚・・・P. -13

柄沢の大塚山の 大塚は

戦国時代の 狼煙台

急ぎの合図にゃ 煙をドン

玉縄城と小田原城

話をするときゃ 狼煙でドン

馬で飛ぶよりゃ 早かった

10. 片瀬の戻り松・・・P-14

都から片瀬にきかかる 西行さん

先ゆく子供に 道問へば

夏枯れ草を 刈りに行く

子供に問答 かけたけど

子供の頭が よすぎたか

西行トボトボ 戻り松

11 オシャモジ様とハグロ・・・P. -16

その昔 川名にキレイな 姫住んだ

頼朝様の 親戚で

キレイなキレイな 姫だった

コンコン泉の その水で

朝な夕なに ままたいた

オシャモジ様とは その泉

12. 旗立山・・・P-16 -17

宮前の 御霊神社の山つづき

旗立山の テッペンに

八幡太郎義家が 旗立てた

奥州 平将門を

征伐するぞと ヒラデーニ

軍勢集めの 旗立てた

13. 龍が川の水を飲んで話・・・P-18 -19

宮前の竜灯山に 竜が出た

尻ッ尾で笠松 三巻きして

柏尾のザァザァで 水飲んだ

油の商人（あきんど）爺さんが

それ見てビックリ 目を回し

笠松大権現 建てました

14. 矢竹稲荷・・・P-20 -21

宮前の 矢竹稲荷の篠藪は

鎌倉権五郎さんの 目を射った

矢を抜いて 植えたもの

夜中に しのたけビックリコ

矢竹が芽を出し 目が光り

鳥目（鳥海弥五郎）になるなど

音立てた

15. コマヨセ・・・P-23 -24

遠藤と大庭境いの 小糸川

大庭景親 駒清め

渡る大セド オナリ橋

イナリ橋やら キツネ橋

コンゴン コンコン チキチキ

コンチキチノチ

大セド稲荷に 御参詣

16. 鉄砲馬場と おびくに橋・・・P-24 - 25

遠藤の宝泉寺のお比丘さん

丸太担いで 橋かけて

裾をからげて チョイト渡る

お比丘尼橋なぞ 渡らんで

おらが橋なぞ 渡らんか

鉄砲馬場よりゃ なアがいぞ

17. さいなん畑・・・P-25

遠藤の 災難畑をごぞんじか

何を蒔いても 育たない

災難ばかりが 芽を出した

災難食ったら いやだんべ

災難除けたきょ 石蒔いて

南無阿弥陀仏と 叩きゃんせ

18. 貝がら坂・・・P-28

大昔し 小塚のあたりは海だった

ある時地面が 揺れ動き

海の底が 盛り上がる

出来た坂道 汐引けば

貝殻ゴロゴロ ころげ出す

貝殻坂は このあたり

19. 馬場先・・・P-32

宮前のお馬場先をば 掘ったらば

カチンと音する 鍬の先

六尺ほども 又掘れば

大きな石出て 取りどけりゃ

由緒ある名の 馬の骨

ソット土かけ おーがんだ

20. ムジナの話（その一）・・・P-36

遠藤の夜更けの山路や ツルベ坂

ガラ ガラ ガラーッと 音がする

つるべの落ちる 音がする

背中に十の字の 紋つけた

ムジナのアン畜生の いたずらだ

夜更けの山道ちゃ おっかねえ

21. ムジナの話（その二） P-36

夜も更けてトントン 誰かが戸をたたく

おばさん、おばさん 起きねかよ

カノマのマキちゃん 死んだとよ

びっくり夜半に 戸を開けりゃ

だれも居ないで 月ばかり

雨戸にムジナの 足のあと

22. ムジナの話（その三） P-37

怖かったぁ 夜更けて誰かが戸をたたく

パシャパシャパシャパシャ戸をたたく

息を殺して 朝待った

しらじら明けに 戸を開けて

おっかなびっくり 外見れば

ムジナがしっぽで なぜたあと

23. 狐おどり・・・ P-51

狐がよ 川名の狐がとりついた

御弊束こうして こう持って

皆んな囃して 手を打てば

踊り狂って 大騒ぎ

障子の棧に よじ登り

背中を打ったら 憑きとれちゃった

24. 猫が化けた話・・・ P-53

踊り場で 猫がデンドコ踊ってる

太鼓叩いて 笛吹いて

ピーヒャラ デンドコ踊ってる

唐臼粥の 煮えづくり

食った黒猫 笛吹けば

舌の火傷で 笛鳴らぬ

25. 古館橋と鷹匠のこと・・・ P-60

お鷹匠 こぶしに鷹をとまらして

名主 土下座をする中を

土足で座敷に 上がり込む

弥勒寺名主の 加藤さん

川名の名主は 砂川さん

鷹匠の泊まりは ヤンなるなぁ

〔注〕古館橋は、ほかに、鷹匠橋とも言う。

ただし、大清水中学校の前の鷹匠橋とは違う。

26. 河童のまな板・・・P-61

宮前の古館（こだて）の橋の すぐ下に

河童の昼寝の 岩がある

まな板みたいな 岩がある

月夜の晩に ソッと見りゃ

亭主の河童が 酒飲んで

女房の河童が 踊ってた

27. 梶原の泣きんづら橋・・・P-62

梶原のなきん面橋 渡るでねえ

嫁にゆく時にゃ 渡るでねえ

嫁にいても 泣きん面

いつまで経つても 子も出来ぬ

村岡古館の 橋怖い

28. 大庭のダイロクさん・・・P-73

大庭のダイロクさんは お大盡

海程広い 大タンボ

田の草取りが 一ト苦労

真ン中に 酒樽デンと据えて

草カリ競争 やらせた

半年かかって 酒飲めた

29. 燕や猫が十二支に入らぬわけ（その一）と（その二）・・・P-4-5 以下第二集

十二支に猫がはいらぬ そのわけは

お釈迦様が 死んだ時

猫が笑って ソッポ向いた

気取った手付きで 顔なせて

こっちを向いて にッと笑った

憎たらしいから 入れないんだ

30. 鼠の話・・・P-9

ネズミがネ 嫁入り先でのイタズラは

柱かじるや 壁かじり

米櫃ガリガリ 食い破る

大判小判も カジり出し

嫁入り先が おどろいて

いたづら嫁御を オン出した

31. 葛原の不動さま・・・P-69

葛原のお不動様は その昔

お池の中に 沈んでた

ある日池から 声出して

私をここから 出しとくれ

小泉じいさん 拾い上げ

今でも大事に まつってる

32. 舟地藏・・・P-70

北條と大庭が 合戦した時に

引地の川を 堰止めて

水枯れ川に 水張った

景親家族を 舟にのせ

逃がした所に 建てたのが

今でも残る 舟地藏

33. 餅 塚・・・P-70

地所たんと 持った地主にゃ役がくる

これを嫌って 地所争ひ

大庭と辻堂が けんかした

辻堂負けて 地所貰ひ

大庭が勝って 地所やつて

祝い餅搗いたところが お餅塚

34. 七つ木と千束・・・P-71

大昔 七ッ木村の槐戸（さいかちど）

大きな七ッの 木があった

トゲトゲだらけの 木があった

この木を切って 倒したら

薪が千束 とれたので

千束村が 出来たとサ

35. 呼ばわり山・・・P-73

その昔 呼ばわり山のテッペンで

二十一日 願かけて

でっかな声で 呼ばわれば

何でも願いが 叶うと言う

嫁に慾しいで 願かけて

どでたく呼んだが 嫁こない

36. 弘法さんの井戸・・・P-74

弘法さん 旅の途中で喉渴き

水を一杯 所望すりゃ

意地悪婆さん 断った

弘法ヒョイト 杖突けば

意地悪婆の 水止まり

突いたところにゃ 水が出た

37. 狐のご馳走・・・P-75 -76

江の島の宿屋の下の お稲荷さん

狐がときどき 集まって

メメズをワラッ束に かくしてる

それ見て島の衆 こう言った

お稲荷さんの 手打ちそば

とてもじゃないけど 食わねえぞ

38. 大谷戸の狐っ火・・・P-99

大谷戸は 狐の嫁入りよく見える

うすッ黄色い 提灯が

あとからあとから やつて来る

大谷戸近くに 来かかると

ポッポッポッと 消えていく

狐の嫁入り 又見たい

39. 犬の脚・・・P-7

以下第三集

その昔 弘法さんが来かかると

犬がエンエン 泣いている

後の足が 大けがで

あわれに思って なおしたら

犬は ウントウント喜んで

用を足すときゃ 足上げる

40. 子どもを呑んだ閻魔さま・・・P-34

いたずらな子供に 手を焼きばあさまが

お閻魔様に こう頼んだ

いたずら子供を 呑んどくれ

おっかね顔した 閻魔様

いたずら子供を ヒョイトつまみ

付け紐残して 呑んぢゃった

41. 大庭のマラゲンさん・・・P-40 -41

大庭のマラゲンさんの もちものは
サキッちょに俵を ブラ下げて
屋敷をグルリと 一とめぐり

母ちゃんパッと 前まくりゃ
父っちゃん 確っかり踏ん張って
俵を背丈に 持ち上げた

42. おせん狐・・・P-57

藤沢の駒下駄お仙って 狐がよ
キレイな女に なりすまし
男を騙しちゃ 酒飲んだ

新地の飲み屋で 又飲んで
徳利山程 飲み干して
木ノ葉で 勘定は一らった

43. 木魚を叩いた狐・・・P-65

石川の自性院の 本堂で
狐が木魚を叩いてた
ポクポクポクポク 叩いてた

やさしい和尚が 忘れず
狐がコンコン 泣きながら
毎日 木魚を叩いてた

44. むじなとお月さん・・・P-68 -69

秋蚕の桑摘み帰りの 夕方に
山の端っこに 月が出た
モヒトツ月が あるくせに

赤い色した ムジナの火
月の真似して ノボってる
皆で見てたら 消えちゃった

45. デーラボッチ・・・P-74

石川のデーラボッチを ご存じか
富士のお山に 腰かけて
担いだもつこの 土撒けば

箱根二子の 山出来た
退屈したので 歩き出しゃ
相模のお国が 揺れ動く

46. 嵐の話・・・P-75

為朝が伊豆の島から 嵐上げた
子供と小判を フン縛り
天まで届けと 糸切った

相模の灘を 飛び越えて
俣野の櫓に ひっかかり
子供と小判が降りて来た
飯田にゃ金持ちたんという

47. おふくろさんという石・・・P-77 -78

諏訪池のおふくろ石は ご神体
おふくろさんと おんなじで
やさしく構えて 動じない

雨乞いすれば 雨降らす
お諏訪神社の お祭りにゃ
神輿と一緒に 担ぎます

48. 汐汲み井戸・・・P-80

葛原の汐汲み井戸を 御存じか
おてんと様が ドント照り
畑の芋が やけっこと

汐 汲み井戸は 枯れないで
キレイな水が わきあがり
塩がザザッと 流れ出す

49. 江の島のおあな・・・P-82

江の島のお穴は 富士まで続いてる
幕府に追はれた 南蛮人
宝を担いで 逃げこんだ

岩屋の奥に 宝埋め
富士の裾野に 飛び出した
岩屋の風は ヒャッコイぞ

50. 笠のやと（谷）・・・P-82 -83

笠の谷戸 富士の裾野にゃ 近い道
頼朝公の 巻狩りに
祐経お供で よく通る

曾我の五郎と十郎が
蓑笠隠して 待ってたが
その日は雨降り 通らない

51. 雷（いかずち）という地名・・・P-83

獺郷の子聖神社の すぐそばに

雷様が 落っこった

ピッカリ ゴロゴロ音たてた

地面にゃ大きな 穴があき

あっちゃこっちに 痣出来た

小字雷 この辺り

52. 河童徳利・・・P-87

宮原で 悪戯河童を つかまえた

放してやったら その礼に

河童の徳利を 置いてった

試しに それで酒飲めば

飲んでも飲んでも なくなる

飲んでも飲んでも なくな

53. 鶴沼の皇大神宮の 御威光は

九台の山車にも あらわれて

夏の盛りに 御祭典

那須野与市の 山車もあり

源平屋島の 戦いに

使った弓は 御宝物

54. 和一さん 鍼の名手になりたいと

江の島神社に 願かけた

満願吉日 夜が明けりゃ

弁天様が あらわれて

お知恵授かり 出世した

正五位 杉山総検校

55. 片瀬には 法難ご難のりこえた

日連様の 竜口寺

ぼた餅供養で 大騒ぎ

天から ぼた餅降ってくる

御信徒太鼓や 萬澄（まんどう）で

行列数千 数万人

56. 辻堂の田畑明神社（デンバクサマ）の
すぐそばを

侍お馬で 来かかって
原ッパに 逆さにムチさした

さしたムチから 芽をふいて
茂り茂った 葭の原
逆様葭の 原出来た

57. 昔から芝居や 唄にも語られた

小栗判官 照手姫
藤沢宿での 物語り

いろいろ苦勞は したけれど
遊行寺ウラ手の 長生院
今も仲良く 並んでる

58. 台町に ふしぎな神楽の獅子がある

はやり病も すぐ治す
悪魔退治も してくれる

寝る時 獅子に足向けりゃ
朝方 頭が向いていた
枕返り獅子で 今もある

59. 雪が降る 用田の原に雪が降る

チラチラチラチラ 雪が降る
ピカピカピカピカ 灯が燃える

チカチカチカチカ 菖蒲沢
倉見の原でも ピッカピカ
雪の降る夜の 狐ッ火

60. 宮原で 大きな鰻をつかまえた

キザンで 鍋で煮ていたら
鍋の鰻が 声出した

ウス気味悪いで 逃がしたら
キザンだ鰻が つながって
元の姿で 逃げてった

おわり。

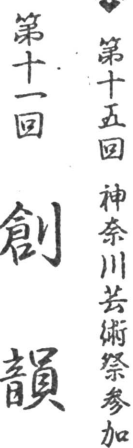
第二十回 記念番組

日本芸能百撰会
長年
百撰会
又次



(八時三十分終演予定)

日本芸能百撰会



創韻會

主 催 創 韻 會
後 援 藤 沢 市
協 賛 江ノ電沿線新聞社

とき 平成二年十一月二十九日(木) 午後一時 開演
ところ 藤沢市民会館小ホール 午後四時三〇分 終演

と き 八月二十日(日) 午前 九時三十分 開場
と ころ 藤沢市民会館小ホール 開演

主催	日本芸能百撰会
後援	藤沢市邦楽舞踊協会
後援	藤沢市教育委員会
後援	神奈川県新聞社

祝曲	講演	祝辭	皇曲	松の緑	神奈川県指定無形文化財記録映画 「浦賀の虎踊と三崎のチャッカラ」上映 尺八、茶の湯音頭	深山里んど風う	浜町明川の岸	浦島	七福神	六段	寿競	秋の月かげに出て	堀池の川	五月かしよ	本能寺	蓬萊	越後獅子	都山麓本曲 若人の飲び	川たこ水	今だかさ	ふでのかさ	秋色種
寧尺八合奏	原沢市文団連会長 服部清道先生	澤山夢沢市長	謡曲	長唄	尺八、茶の湯音頭	小唄	小唄	長唄	舞踊	筆曲	尺八	小唄	小唄	長唄	琵琶唄	舞踊	地謡	尺八	小唄	小唄	小唄	長唄

[illegible]



湘南瓦版

第79号

THE SHONAN KAWARABAN

果物とうなぎが人生を…。

日本芸能百撰会・創韻会会長 杵屋五十郎さん(72)AB型。東京生。

親父の道楽に子供がつき合って 東京は芝、扇や錦絵の卸し問屋の8番目か9番目の子供。親父が道楽者でしてね。芸人が大好きだったので所詮交遊関係もそっち方面が多く、兄弟も芸者屋、料理屋、姉はコロンビアの専属で清元の延弥栄、長唄の杵屋栄玉。親父は私を芸人にしたくて月謝をいくらでも出すよ…と。軍人になりたくて 17才の時家出。NKHが芝の愛宕山にあった時分て、その近くの洋服屋の2階にかくれ住んだ。そして神田の予備校へ。芝から歩いてね、研数学館や藤森良三先生のやっていた日土講習会、それにドイツ語中国語など。昼めしぬいてその金でワラ半紙20枚買って豆つぶのような字でノート替りに。九州出身の豪快な男がいてね。お互いに今に立派になって皇居前で会おうと約束したけど日時を言うのを忘れて…。僕の履物がなくて、そいつがあっちこちの学校から赤白の鼻緒のぞうりを失敬してきてくれたけど、しまいには荒物屋から馬のワラジを買ってね。それを履いての帰り道、すでに雪はやんでましてね、皇居の真上に月が煌煌と…それを見た時、オレは何の為にこんな苦勞をと思わず涙が出てしまった。

千疋屋の果物と橋前のうなぎ 明日、士官学校の試験という日、親父にとっつかまっちゃった。そして毎日芸人になれと攻め立てる。ある日銀座の千疋屋につれてかれやたら果物を食わせられ、それから新橋の橋前でうなぎを。ついにOKしちゃったんですよ長唄やるって。発明王 鉄工所の一人娘と22才の時結婚。昭和19年に群馬県の伊香保温泉のまゝ裏に疎開。コンニャクを糊に、竹と紙で骨6本の番傘を発明、油は岡山から取り寄せて、学校へ持っていったら売れた売れた。油が無くなり代用品を使ったら雨で流れて、子供が「お前んとこの傘は」というわけて、いじめられて、それで次は代用ガラス。ところがキャサリン台風で山津

波。あつという間にガラス工場(?)は泥の下。戦後保土ヶ谷で会社作って「動く広告」なんてのも発明、特許を取ったりしたけれど…。わたしは気楽な人間でね ある日、何もかもやめたと思ったんですよ、そしてこの道一筋に。現代曲もいずれは古典になるんだから、いいものを後の世に残したい。それに新しい試みもね。三絃とオーケストラを福永陽一郎さんの指揮でやったり、ジャズと三絃等々。作詞したり作曲したりも社会を広い目で見ていないとね。「人間って、ひとりて生きてるんじゃないよ」ってこと、28才の時気がついて、それを今も大切にしてるんですよ。



初代杵屋五三郎、盛大教授山田抄太郎に師事。邦楽を守りながら、日本芸能百撰会15年、創韻会7年、平成50年、18歳節をみえがらせる等、多才な活動をしている。この夏、国立劇場で邦楽功労賞を受賞。履次は昭和8年から在住。本台は電話

「人情の町」に

平和噛みしめる



木村 五十郎
(本名 小島 馨)

私は東京がまだ東京市といつたころの芝区金杉浜町の生まれで、少年期を芝西應寺町で過ごしました。いま考えてみると、あの時代は今日テレビで見る時代劇の庶民の住む下町の様子にたいへんよく似ていて、通りを行き交う人の服装も和服姿の人が多く、路地裏の様子や住んでいる人たちの人情も時代劇に出てくる人物とほとんど変わらず、陽気で気楽な時代でした。

そんな雰囲気濃い七曲りという、やたらと曲がり角の多いところに私の家があり、父親は団扇屋を営んでいました。小学校はすぐ鼻先の芝小学校。兄弟姉妹は皆ここでお世話になりました。喧嘩はする、どぶには落っこちるで、いたずらは当然の遊びのうちでした。父親は頑固者で、母親もたいへん

威勢のよい人でした。父親が芸事が好きだったため、子供は三味線を習ったり踊りを習ったりしました。

芝神明様のお祭りは期間が長く、だから祭りの通称がありました。そのころの神輿の担ぎ手は暴れるバケツで水はぶっかけるで、子供心にも荒っぽい威勢のよい町だ、と思いました。

成人すると、そのころ郊外といわれた肥のにおいのする荻窪に転居しました。その後、家庭を持って白金、麻布に移り住み、毎日、夕方になると何とはなしに銀座でブラつかないと(銀ブラ)眠れないといった、不景気ではあるがたいへん気楽で平和なときを過ごしました。

ところが、日中戦争に続く太平洋戦争。私の兄も戦死。勝った勝ったの戦果のラジオ放送。そのうち様子がおかしくなり、疎開騒ぎに。空襲警報の鳴り響かぬ日はなく、私たちも慣れぬ地方へ疎開しました。その地で山崩れに見舞われ、家も家財も流されて、それをもとではどなく妻も他界しました。あれほど激しかった戦争も、国民を悲惨の地獄絵図に突き落とし

たまま終戦となりました。

疎開から13年目に、地獄から脱出する思いで湘南の地にたどりつき、数十年経ったいま、仕事も落ち着きました。先日、はからずも生まれ故郷の港区役所の前に立ち、戦争の惨禍と平和の幸せとを噛みしめました。

※来年1月13日(月)の正午から1時まで、港区役所1階ロビーにて、木村五十郎さん一座の邦楽(長唄)コンサートを開催する予定です。(木村五十郎さんは、邦楽界の名人といわれた初代木村屋五三郎さんの直弟子。いまの人間国宝木村屋五三郎さんの兄弟子にあたります。)

創韻会

11月8日(金)13:00 国藤沢市民会館 国説経節と小栗判官と照手姫との巡り合いほか 国木村屋五十郎ほか
国創韻会 ☎0466(23)6501 有料

「鵠沼」第61号
1991年9月24日発行

民俗学者丸山久子先生
田中まさ子

大庭御厨とその背景
吉田興一

芸道一筋
編集委員 遠藤隆二
野口ゆくえ

藤沢民話甚句
杵屋五十郎作詞作曲

編集・発行 鵠沼を語る会

鵠沼公民館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34